

鑑賞授業の形を探る ～美術館新聞の実践から～

長友 紀子

(奈良教育大学 附属中学校)

A Study of Art Appreciative Education —A Practice of Museum Newspaper—

Noriko NAGATOMO

(Nara University of Education Junior High School)

要旨: 鑑賞授業には様々な形が考えられる。生徒の作品を互いに鑑賞しあい、造形的な良さや発想の面白さについて話し合う形式は、現在も実践中であるが、実物を目の前にする鑑賞は、時間や条件が整わないとなかなか実現することが難しい。そういった中で、どのような形で生徒に実物の作品と触れあう機会を持たせることができるか、新しい鑑賞授業の形を探る。

キーワード: 鑑賞教育 Art Appreciative Education 美術館・博物館 Museum

1. はじめに

本稿は^(註1)、奈良教育大学附属中学校研究紀要第42集収録の実践報告「鑑賞教育の形を探る～価値意識創造のために～」をもとに、「美術館新聞」の実践について述べるものである。

鑑賞領域については、中学校学習指導要領に「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」⁽¹⁾とあり、また、各地の美術館・博物館でも子どもたちの作品鑑賞を手助けする教育普及プログラムが実施されている。現在本校では、授業時間の中で美術館を訪問したり、学芸員の方を学校に招いて「出前授業」をしていただいたり、といったカリキュラムは組んでいない。しかし、地元奈良には奈良国立博物館、県立美術館をはじめとした多くの優れた美術館があり、また、近隣の京都や大阪、神戸にも国立・私立を含め多くの美術館・博物館が存在している。美術館新聞づくりは、学校の授業時間内では行うことのできない鑑賞領域の題材として実践を行い、美術館・博物館を利用した鑑賞の形を探るものである。本実践は、美術館・博物館の教育普及プログラムと直接関わっては行っていない。1年生の夏休みを利用し、生徒が各自で美術館・博物館を訪れて、その経験を新聞にまとめるという形をとる。この経験が生徒に与える影響を考察し、美術館と学校との連携も含めて、鑑賞授業の形について探っていく。

2. 生徒の実態

本校の生徒は、比較的落ち着いた生活環境にあり、美術館・博物館へは親に連れられて行ったことがあるという場合が多い。今回実践を行った第1学年について、簡単なアンケートを行った結果、今回の課題で初めて美術館・博物館を訪れたという生徒は全体の約14%だった(図1)。また、これまでに美術館・博物館を訪れたことのある生徒の訪れた回数は、図1のような結果となり、美術館・博物館に慣れている生徒が多いことがわかった(図2)。

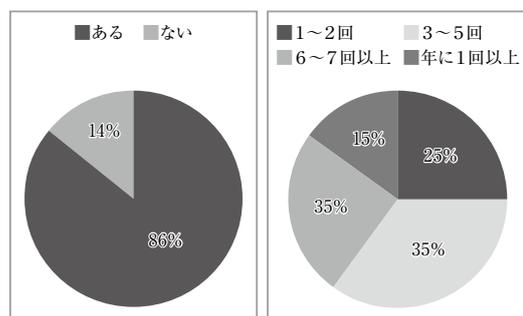


図1

図2

美術館・博物館に初めて行った生徒と、行ったことのある生徒に、それぞれ美術館のイメージを「楽しそう」「難しそう」の二択で尋ねたところ、「難しそう」と答えた生徒が初めての生徒では約54%、行ったことのある生徒では約47%で、行ったことのある生徒の方がやや低い数値ではあったが、全体の半数近くの生徒が「難しそう」だ

と感じているという結果であった。

3. 実践のねらいと方法

3.1. 鑑賞授業の状況

本校の鑑賞授業の中心となっているのは、授業で制作した自分たちの作品をお互いに鑑賞しあう形式のものである。何時間もかけて制作した作品を友だちと見せあい、工夫した点を説明したり、友だちの作品の良さに感心してみたり、また、友だちから良いところを褒めてもらって嬉しそうに自分の作品を見ている生徒を見ていると、鑑賞を楽しんでいる様子がよくわかってとてもほほえましい。ここでは、生徒は、同じテーマ・同じ材料で制作しながら、友だちが自分とはまったく違う作品をつくることに気付き、そのような友だちとのコミュニケーションを通して、ものの見方の違いや価値観の違いを知って、それを認めあうようになっていく。この鑑賞の形からは、自分自身の作品に対する客観的な視点の形成や、次の制作に対する展望、次はもっとこうしたい、という意欲が生まれているように思う。

このような鑑賞に加え、本物の作品に触れ、造形的な美しさや良さについてより深く味わう経験をさせたいのだが、当然のことながら、実物は美術館・博物館にしかない。先に述べた中学校学習指導要領にもあるように、「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」を、授業内で実践したくとも、実際に美術館・博物館を訪れることがなかなかできない。そこで、夏休み等の長期休暇を活用し、生徒に本物に触れる経験をさせたいと考えた。

3.2. ねらい

ねらいの1つめは、美術館・博物館に行くという体験をさせることにある。初歩的なことであるが、中には、この題材をきっかけに初めて美術館・博物館に行くという生徒もいる。2つめは、生徒の実態でも述べたように、本校の生徒の半数近くが美術館・博物館に対して、「難しそう」といった否定的なイメージを持っている。まずは、自由に、実物に触れる楽しさを感じてもらうことをねらいとした。

次に、ただ単に美術館に行き、感想文を書くだけでは、鑑賞の学びとして生徒間で共有できないので、「美術館新聞」という形で作品化することとした。生徒と対話する中で、美術館を難しそうと感じる生徒は、作品とじっくり向き合う経験をしていない場合が多いのではないかと感じた。アンケートで、誰と一緒にいったか、という項目の回答でもっとも多かったのが両親や家族で、多くは大人の選んだ展覧会に連れて行かれていると思われた。今回は、自分で美術館を選んで行くことで興味を持っ

て作品を見ることができないのではないか、と考え、こちらからある程度の情報は与えるが、基本的に自分で面白そうと思う展覧会を探して行くように指示を出した。その上で、本物の作品から感じたことを新聞の記事として具体化して、その記事を読んだ友だちが「私もその美術館に行ってみよう」と思わせるような新聞をつくり、自分の経験や友だちの経験を共有して、もっと美術に触れたい、作品を見たい、という美術への関心を高めることを、2つめのねらいとした。

3.3. 実践の方法

本題材の導入は、1学期の最後の授業で行った。「美術科通信」という普段から授業内で配布しているプリントを使って、夏休み中に日本全国で開かれる特別展の内容と、美術館・博物館の所在を一覧にして見せ、それらを参考にしながら、そこに載らない美術館・博物館でも自分が面白そうと思う展覧会を探し、自由に選んで良いということを伝えた。さらに、新聞作成方法として、学校指定のスケッチブックの画用紙（八つ切りサイズ）1枚を縦書きで使用するという、画材は鉛筆・色鉛筆・色ペン・絵の具等自由であること、絵や写真を使ってよいということを示した。内容については、新聞のタイトルをつけること、見た人がその美術館・博物館に行きたくなるような記事にすることだけが条件であるとし、描き方やレイアウトを各自で工夫して制作するように指示を出した。できるだけこちらからの規制はなくし、生徒に自由に描かせて、彼らが美術館・博物館で何を感じたか、個々の作品に表れてくるものを共有化したいと考えた。

4. 作品から見る実践の様子

4.1. 全体から

生徒が訪れた美術館・博物館でもっとも多かったのが、地元奈良の奈良国立博物館で、次いで奈良県立美術館、奈良市写真美術館、京都文化博物館、京都国立近代美術館などであった。他にも、MIHO MUSEUMや兵庫県立美術館、京都国立博物館、大阪市立美術館などの近隣各県の主要な館のほか、国立新美術館、東京都現代美術館、地中美術館、西宮市大谷美術館、大塚国際美術館、国立西洋美術館、和歌山県立近代美術館、北海道立近代美術館、霧島アートの森、京都大学総合博物館など、美術科通信で紹介した以上に様々な美術館・博物館を訪れていた。

「美術館新聞」の内容としては、もっとも多かったのが展示内容の紹介で、展示作品のキャプションを写してきて、自分の感想を書き加えたと思われるものであった。次いで多かったのは、作家の紹介である。これは奈良市

写真美術館や、堂本印象美術館、京都国立近代美術館の鈴木治展など、個人をテーマにした特別展に行った生徒の作品に多く見られ、展覧会の構成がそのまま影響を与えているという形であった。こちらも、展覧会の図録や会場に示された作家についての説明板を写し、再構成したと思われる。

その他では、和歌山県立近代美術館で行われていた「美術の時間」展に行った生徒は「時間」というテーマで展開される様々な作品に新鮮な面白さを感じ、理科の実験を見たかのように「時間にもいろんな種類があることがわかりました」と感想を述べていた。美術館の展示内容が中学生1年生という年齢にぴたりとはまった結果であろう。

4.2. 個々の作品から

第1学年156名の作品の中から、いくつか紹介していく。

作品1 (生徒1・女子)

奈良国立博物館・特別展「みほとけのかたち」

内容は、「1. はじめに(展覧会の概要紹介)、2. 仏像を見るときポイント(仏像のプロポーションに注目して見ること、項目ごとに前置きの文章を読むと仏像の様子が感じ取りやすくなる、とアドバイス)、3. 仏像紹介(服、髪、顔など部位に分けて紹介)、4. 感想」となっている。感想では、「このように細かく仏像を見ることがひとつひとつの仏像の良さがわかりました。また、よく似ている仏像でも、よく見るとまったく違い、たくさんの仏像を見れてとても面白かったです。」と書き、最後に手描きの釈迦如来像のイラストを加え、「見に来てね」と吹き出しをつけてしめくくっている。展覧会の細部まで丁寧に見て、仏像を実際に見ることで



作品1

「よく似ている仏像でもよく見ると違う」という発見ができたといえる。

作品2 (生徒2・男子)

MIHO MUSEUM「ファインバーグ・コレクション展～江戸絵画の奇跡～」

内容は、「1. 美術館の立地、環境、2. 展覧会の概要、3. 特別展展示内容の紹介、4. 常設展示の紹介、5. 感想」となっている。なかでも、生徒2の新聞で魅力となっているのは、「5. 感想の部分」である。『おどろきの連続!』と見出しをつけて書いている。

「今回MIHO MUSEUMを見て驚かされるものがいっぱいありました。建物のことでは、建築容積の8割以上が地下にあること、山中に建てられていることに驚きました。絵や美術品については、「江戸絵画」には美術の授業で習った技法が使われていることを知りました。あと、世界の本物の古代美術が集まっていることにも驚かされました。この美術館に初めて行く人は、見出しにも書いているように、驚きの連続だと思います。このMIHO MUSEUMは普通の美術館とひと味違います。とても景観のよい、自然を満喫できる穴場の美術館、美術の桃源郷、「MIHO MUSEUM」に一度足を運んでみてください。」

新聞としてのレイアウトの良さもあるが、生徒2が初めて訪れた美術館の建物にまず大きな驚きを受けたことから彼の美術館体験が始まり、展示内容に興味を持ち、誰かにこの美術館のよさを伝えたいと思ったことが文章からもよく伝わってくる。展示内容について、4. 常設展の紹介で「約1000年前のエジプトの美術品、300年前の中国・日本の美術品はどれも本物で、本当に驚かされました。エジプトには、今でも使われている金属加工



作品2

技術や彫刻、神殿といった美術品をつくる技術があったのです。それが今でも続いているってすごくないですか。」と書いている。展示を見ているときの彼の興奮が伝わってくるようで、とても良い経験をしたといえる。

作品3 (生徒3・男子)

松柏美術館「女性たちの物語～松園のモデルとなった才女たち～」

内容は、「1. 美術館の概要、2. 松柏美術館を選んだ理由、3. 特別展展示内容の紹介、4. 上村松園の紹介、5. あとがき」となっている。生徒3の作品の魅力は何点もあるが、まず、「2. 松柏美術館を選んだ理由」として「僕の住んでいるところでは有名な美術館と聞いたから。遠く美術館に行きたかったけど、まずは自分の住んでいるエリアをちゃんと知ることから始めようと思ったため」と書いているところである。地域に優れた美術館がある環境の良さを知ることが出来たといえる。次に、「3. 特別展展示内容の紹介」では、自分の感じた作品の良さを文章にして表現することができている。「(作品「楊貴妃」を見て) 青い衣装の透明感や、楊貴妃の凛とした表情、当時の時代背景がわかる髪飾りなどが美しいと思う。この作品を目当てに見に来ている人が多かったようでたくさんの人が長く立ち止まっていた」「(『下絵が展示されていました!』という見出しをつけて) 僕は、画家は直接絵を描くものだと思っていましたが、下絵の展示を初めて見て、こんなに細かく下描きするんだと感心しました。しかもたくさんの紙をつぎはぎしてあるものがほとんどで、パーツを組み合わせて作っている感じがしました。下絵を見た後に、完成した作品を見ると下絵にはなかった模様があったりしてそれを探すのが面白かった。」という文章からは、通常教科

書等では見ることのできない作品の制作途中を見て、素直な感動を感じている様子がうかがえる。最後のあとがきで、生徒3はこう述べている。「美術館を訪れたのは初めてだった。最初は自分にちゃんと理解ができるのか半信半疑だったけど、行ってみたら一枚一枚の解説を読むことで初心者の僕でも十分楽しむことができたのでとても良かったと思う。次回は上村淳之氏の「花鳥画」の作品展にも行ってみたいと思う。」今回の美術館訪問が、美術館の否定的なイメージを無くし、身近なものとして接することができるようになるきっかけとなったのではないだろうか。

4.3. 考察・今後の課題

夏休み後、作品提出の時の生徒の様子は、様々であった。授業が始まる前、美術教室に集まってきた生徒は、互いにスケッチブックを見せあい、まずは新聞としての見た目の良さに注目していたが、次第に訪れた美術館について話題にしはじめた。同じ美術館に行ったことを知って、どんなものを見たかをおしゃべりしあう生徒、遠く美術館に行った友だちに驚く生徒、教科書に、自分の行った美術館が紹介されていることを発見して、教師(筆者)に嬉しそうに見せに来る生徒など、それぞれが自分の行った美術館・博物館に何らかの印象を受けて課題を終えた様子が見られた。提出された作品は、新聞としてのレイアウト・描き方の良さの観点と、内容面の良さの観点から各クラス5～10点を選び、美術教室近くの展示用掲示板に掲示を行った。休み時間には、掲示板の前に立ち止まって作品を見る様子が見られ、2,3年生は自分たちが1年生のときに行った同じ課題でもあるため、後輩がどんな作品を作ったかと興味深そうに見ている姿もあった。

全体として、美術館・博物館訪問は生徒たちにとっては楽しい経験と感じられたようである。アンケートでは、美術館のイメージを「難しそう」と感じていた生徒の約8割が、行ったあとの美術館のイメージを「楽しかった」と答えている。具体的にどこが楽しかったかについては、「美術館と聞いた時は、絵がたくさんあって、私のような素人には楽しめないかと思っていました。でも、実際に行ってみると『きれい』だけじゃなくて、『おもしろい』や『なんの絵なんだろう?』といったようなイメージの違う作品ばかりだったので楽しかったです。」「作品の展示方法が面白かった。また、美術館の外観が工夫してあって良かった。」などのコメントがあった。

新聞にまとめることに関しては、過去の作品例を見ただけで、特に作り方やレイアウトの方法などを指導せずに制作させたため、生徒によっては描き方がわからず苦勞した様子の作品も見られた。ただ、この題材の場合、自由に描かせた新聞を見ることで、生徒が美術館・博物館のどの部分に興味を持ったかがわかるという側面もあ



作品3

るため、形式を指定することはあまりしないようにしたいと考えている。美術館・博物館を訪れたという経験がまず大事であるし、友だちの作品を見ることで、自分にはなかった視点を知ることができるので、その点で学んでいくことができれば良いのではないかと思う。

今後の課題としては、徳島県立近代美術館の森芳功氏が指摘している点がある。徳島県立近代美術館が実践されている小学生から大学生までの作品鑑賞支援プログラムについての研究⁽²⁾の中で、森氏は以下のように述べている。「小学校4年生頃から表れはじめる特徴的な反応のあり方をもうひとつあげるなら、素直に自己の気持ちに投入したり、空想や連想を楽しんだりすることに躊躇する傾向であろう。この傾向は、美術鑑賞になじみのない子どもの場合、小学校高学年（5～6年生）になるとさらに強くなっていくのである。～中略～適切な鑑賞支援を行わずに放置すると、自己と作品を結び付けることができず、「美術はわからない」という子どもをつくる原因にもなると思われる。」（波線部筆者）

本校の生徒でみると、「美術館新聞」で初めて美術館に行く生徒は、鑑賞という行為そのものも初めての体験となる。アンケートで美術館によく行くと答えた生徒でも、「美術館新聞」に書かれた感想などから推測すると、適切な鑑賞支援を経験しているとは考えにくい。多くの生徒は、美術館での体験を「楽しかった」と感じているが、美術館に行く前と行った後で「難しそう」という印象が変わらなかった生徒を、どのようにフォローするか、鑑賞支援のあり方を、今後の課題として考えていかなければならない。

森氏は、同論文のまとめで「鑑賞になじみのない子どもたちを美術館に迎えるとき、美術史や美術理論の概念をわかりやすく伝えることよりも、子どもたちがそのとき持つ知識や感性によって鑑賞を進めていき、他の子どもたちとのコミュニケーションによって鑑賞を楽しむためのサポートが必要だ」と述べられている。本校でも、授業時間内に美術館に生徒を連れて行くことのできない現状において、最大限のサポートをするために、美術館新聞を生かした鑑賞の進め方を検証していきたい。

5.終わりに

鑑賞の授業は、生徒にとって楽しいものであって欲しい。作品を見る喜びや楽しさを感じるからこそ、ものを作ろうという意欲がわいてくると思うからである。これは、学習指導要領の中でも指摘されている⁽⁴⁾。子どもたちを取り巻く環境や日常生活の中には多くの美術がある。授業内でできること以外でも、手だてを考えて、できるだけ多くの機会をもって子どもたちが美術に触れ、感性を働かせることができるような題材設定をしていきたい。今回の美術館訪問と美術館新聞作りはそのひとつの方法として今後も発展させていこうと思う。この題材の継続と

して、今年度より第2学年に美術館訪問Ⅱとして、美術館・博物館の展示方法に注目して見学し、学んだことや感じたことを新聞にまとめるという課題を行った。これに関しては、稿を改めて報告することとしたいが、1年生の時に行った美術館訪問とは違った見方で展示を見ることで、新たな視点をもって美術に接する経験となったようである。本題材を、単一のものとして終わらせるのではなく、様々な側面から制作や鑑賞につなげていきたい。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省『中学校指導要領解説美術編』日本文教出版、pp.95-96、2008
- (2) 森芳功「鑑賞支援における分析的要素、表現的要素、コミュニケーション的要素とその関連について—徳島県立近代美術館における鑑賞教育の実践から—」『美術科教育学会誌(30)』pp.411-423、2009
- (3) 上野行一『私の中の自由な美術』光村図書、2011
- (4) 前掲(1) pp.15 2008

註

- (註1) 本稿は拙稿「鑑賞教育の形を探る～価値意識創造のために～」『奈良教育大学附属中学校研究紀要』第42集、2013に記述した「美術館新聞」について、焦点をあて報告するものである。